

**[B年] 公現後第5主日(2022年2月6日)****【旧約聖書日課】サムエル記下 12章1～13節**

1主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来て、次のように語った。

「二人の男がある町にいた。

一人は豊かで、一人は貧しかった。

2 豊かな男は非常に多くの羊や牛を持っていた。

3 貧しい男は自分で買った一匹の雌の小羊のほかに何一つ持っていなかった。

彼はその小羊を養い

小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて

彼の皿から食べ、彼の椀から飲み

彼のふところで眠り、

彼にとっては娘のようだった。

4 ある日、豊かな男に一人の客があった。

彼は訪れて来た旅人をもてなすのに

自分の羊や牛を惜しみ

貧しい男の小羊を取り上げて

自分の客に振る舞った。」

5ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。「主は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。

6小羊の償いに四倍の価を払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから。」7ナタンはダビデに向かって言った。「その男はあなただ。イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたに油を注いで

イスラエルの王としたのはわたしである。わたしがあなたをサウルの手から救い出し、8あなたの主君であった者の家をあなたに与え、その妻たちを

あなたのふところに置き、イスラエルとユダの家をあなたに与えたのだ。不足なら、何であれ加えたであろう。9なぜ主の言葉を侮り、わたしの意に

背くことをしたのか。あなたはヘト人ウリヤを剣にかけ、その妻を奪って自分の妻とした。ウリヤをアンモン人の剣で殺したのはあなただ。10それゆえ、剣はどこしえにあなたの家から去らないで

であろう。あなたがわたしを侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたからだ。』11主はこう言われる。『見よ、わたしはあなたの家の者の中から

あなたに対して悪を働く者を起こそう。あなたの目の前で妻たちを取り上げ、あなたの隣人に与える。彼はこの太陽の下であなたの妻たちと床を

共にするであろう。12あなたは隠れて行ったが、わたしはこれを全イスラエルの前で、太陽の下で行う。』」

13ダビデはナタンに言った。「わたしは主に罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。」

**【使徒書日課】ペトロの手紙一 1章22～25節**

22あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。23あなたがたは、朽

ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです。24こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、

その華やかさはすべて、草の花のようだ。

草は枯れ、

花は散る。」

25しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。

**【福音書日課】**

マルコによる福音書 4章10～12節、21～34節

10イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。11そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。12それは、

『彼らが見るには見るが、認めず、

聞くには聞くが、理解できず、

こうして、立ち帰って赦されることがない』

ようになるためである。」

21また、イエスは言われた。「ともし火を持って来るのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。22隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、公にならないものはない。23聞く耳のある者は聞きなさい。」

24また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは自分の量の秤で量り与えられ、更にたくさん与えられる。25持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

26また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、27夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。28土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。29実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

30更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。31それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、32蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

33イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。34たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## サムエル記下 12章1～13節

1主はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンはダビデのところに来て語った。

「ある町に二人の男がいた。

一人は富み、一人は貧しかった。

2 富める男は非常に多くの羊や牛を持っていた。

3 貧しい男は自分で買い求めた

一匹の雌の小羊のほかは

何一つ持っていなかった。

彼はその小羊を養い、

小羊は彼のもとで、彼の息子たちと共に成長し

彼の乏しいパンと一緒に食べ、彼の杯から飲み

彼の懐で眠り

彼にとってはさながら娘のようであった。

4 あるとき、富める男のところへ

一人の旅人がやって来た。

富める男は

自分のところへ来た旅人をもてなすのに

自分の羊か牛を取って料理するのを惜しみ

貧しい男の小羊を取り上げて

自分のところへ来たその人のために

振る舞った。」

5ダビデはその男のことで怒りを燃やし、ナタン

に言った。「主は生きておられる。そのようなことをした男は死ななければならない。6物惜しみをし、そんなことをした報いとして、小羊を四倍にして償わなければならない。」7ナタンはダビデに

言った。「それはあなたです。イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたに油を注ぎ、イスラエルの王としたのは私である。私はあなたをサウルの手から救い出し、8あなたの主人の家をあなたに与え、主人の妻たちをあなたの懐に与え、イスラエルとユダの家をあなたに与えた。もし不足ならば、私はいくらでもあなたに与えたであろう。9なぜ、主の言葉を侮り、私の意に背くことをしたのか。あなたはあのヘト人ウリヤを剣にかけ、彼の妻を奪って自分の妻とし、アンモン人の剣で彼を殺した。10それゆえ、剣はあなたの家からとこしえに離れることはない。あなたが私を侮り、ヘト人ウリヤの妻を奪って自分の妻としたからである。』11主はこう言われる。『見よ、私はあなたの家の中から、あなたに対して災いを起こす。あなたの目の前で、あなたの妻たちを取り上げ、あなたの隣人に与える。彼は白日の下で、あなたの妻たちと寝るだろう。12あなたはひそかにこれを行ったが、私はイスラエルの全ての人々の前で、白日の下でこれを行う。』」

13ダビデはナタンに言った。「私は主に罪を犯しました。」ナタンはダビデに言った。「主もまたあなたの罪を取り除かれる。あなたは死なない。」

## ペトロの手紙一 1章22～25節

22あなたがたは、真理に従うことによって魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、清い心で深く愛し合いなさい。23あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わる事のない生ける言葉によって新たに生まれたのです。24こう言われているからです。

「人は皆、草のようで

その栄えはみな草の花のようだ。

草は枯れ、花は散る。

25 しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」

これこそ、あなたがたに福音として告知された言葉なのです。

## マルコによる福音書 4章10～12節、21～34節

10イエスが独りになられたとき、イエスの周りにいた人たちが、十二人と共に、たとえについて尋ねた。11そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘義〔神秘〕が授けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。12それは、

『彼らは見るには見るが、認めず

聞くには聞くが、悟らず

立ち帰って赦されることがない』

ためである。」

21また、イエスは言われた。「灯を持って来るのは、灯の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。22隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、明るみに出ないものはない。23聞く耳のある者は聞きなさい。」

24また、彼らに言われた。「何を聞いているかに注意しなさい。あなたがたは、自分の量る秤で量られ、さらに加えて与えられる。25持っている人はさらに与えられ、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。」

26また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が地に種を蒔き、27夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。28地はおのずから実を結ばせるのであり、初めに茎、次に穂、それから穂には豊かな実ができる。29実が熟すと、すぐ鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」

30また、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。31それは、からし種のようなものである。地に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、32蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」

33イエスは、このように多くのたとえで、人々の聞く力に応じて御言葉を語られた。34たとえを用いずに語ることはなかったが、ご自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・2月6日「公現後第5主日」の日課主題は「たとえで語るキリスト」。

・旧約聖書日課は、「サムエル記下」から、ダビデ王がウリヤの妻の件で預言者ナタンから叱責される場面の一部。使徒書日課は、「ペトロの手紙一」から、草花のたとえを用いて御言葉の永遠性を教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、たとえで教えらるる主イエスの御言葉集としてまとめられた箇所。

**旧約日課(サムエル下 12章より)**

・「サムエル記」は、ユダヤ教正典「前の預言者」の第三に置かれた「王国草創物語」で、「士師記」から続く物語として始められ、「列王記」に続く物語として閉じられる。上下巻に分けられているのは便宜上であるが、内容的に、上巻は「サウル王時代の物語」、下巻は「ダビデ王時代の物語」となっている。ただし、「ダビデ王物語」自体は「サウル王時代の物語」の早い段階で始まっており、全体としては基軸となる「ダビデ王の伝承物語」を「サウル王の伝承物語」が補う構成となっている。これらを一つの貫いた物語とする役割を果たしているのが「預言者サムエルの伝承物語」である。両王は、預言者サムエルに「油を注がれ」ることによって王となるべく任じられている。

・日課箇所は、「ダビデ王時代の物語」の中で「預言者ナタンの叱責」として知られる場面の一部。ダビデ王が王宮の屋上から見初めた「ヘト人ウリヤの妻バト・シェバ」を自らの妻とすべく、ウリヤを対アンモン戦争の最前線に送り戦死させたことを、側近預言者ナタンにたとえ話を通して叱責されている。

・「ヘト人」は、旧約聖書中「創世記」から繰り返し現れる民族で、特に「出エジプト物語」関連では、カナンに先住する「七つの民」の一つとして特別に敵対視されているが、民族的出自については明確にされていない(創10章の民族表にも現れない)。19世紀の考古学者が、前17~13世紀にアナトリア半島全域からカスピ海に至る領域を支配していたとされる「ハットゥシヤの帝国」の支配民族を「ヘト人」と同定して「ヒッタイト」と呼ぶようになったが、このヒッタイト系の残余都市国家群がシリア~カナン地方にあったことがわかっている。ヒッタイトは、オリエント世界に鉄器文化をもたらしたとされる。ダビデ王がなぜ「ヘト人」であるウリヤを臣下としていたのかは不明であるが、ウリヤは「ダビデの勇士たち三十人」にも数えられている(サム下23章)。なお、ダビデ王と「ヘト人」の接点として、「ヘト人アヒメレク」(サム上26:6)の名が登場するが、この人物は前後に繰り返し登場している「祭司アヒメレク」(特にサム上21章参照)のことかもしれない。祭司アヒメレクは、ダビデに支援の手を差し伸べたかどでサウル王によって処刑されるが、生き残りの息子アビアタルが、祭

司ツァドクと共にダビデ王の側近としてエルサレム政治を支えた一族の祖として描かれる。

・「預言者ナタン」は、「ダビデ王物語」中、ダビデが北部諸部族からも承認されて「ユダとイスラエル王」となりエルサレムに都を移した場面から突如として登場し、ダビデの王としての行動を左右する側近として描かれる。彼は、「列王記」上1章で描かれるダビデ王の後継争いの中で、ソロモンの後見人(事実上、ソロモンを王として立てた集団)の一人として描かれている。預言者ナタンは、事実上、預言者サムエル(上1章で誕生が、上25章で死が描かれている)の後継者として位置づけられている(「歴代誌」下29:29も参照)。ナタンは、王に対して主の言葉をもって語り、王の過ちをも指摘する役割を果たした預言者として描かれるが、「歴代誌」では王の行為を肯定する存在としてしか描かれていない。

**使徒書日課(Ⅰペトロ1章より)**

・「ペトロの手紙一」の位置づけについては、資料「聖書と祈りの会 220112」を参照。

・日課箇所は、信者が「聖なる者」としての生活に励むことの根拠として、「神の言葉」に対する素朴な信頼が教えられている。24節は、イザヤ書からの引用とされるが、詩編にも類似の表現が見られる。

イザヤ 40:6~8「肉なる者は皆、草に等しい。永らえても、すべては野の花のようなもの。草は枯れ、花はしぼむ。主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。草は枯れ、花はしぼむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」

詩 103:15~16「人の生涯は草のよう。野の花のように咲く。風がその上に吹けば、消えうせ、生えていた所を知る者もなくなる。」

・日課箇所中、「言葉」の訳語が3度現れるが、23節は「ロゴス」が原語、25節は「レーマ」が原語で、多少ニュアンスが異なる。一般に、「ロゴス」は一定の概念を包含する「言葉」の全体を指し示し、「レーマ」は語りとしての「言葉」の現象そのものを指し示すと、理解されている。しかし、日課箇所では、おそらく、25節が「イザヤ書」からの引用で「レーマ」が用いられたことに引きずられて、そのまま「レーマ」が繰り返されているのだろう。本書箇所の他の箇所でも「言葉」と訳されている原語はすべて「ロゴス」である。

・24節「人」と訳される原語は「サルクス」で、通常は「肉」と訳される語。旧約ヘブライ語で「肉」を意味する「バーサール」は、しばしば「人」を指し示して用いられており、ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳)では、多くの場合に訳語として「サルクス」を充てている。一方、類語として通例「体」と訳される「ソーマ」も、ほとんど同じ意味で用いられることのある語だが、「パウロ書簡」などでは「サルクス」と「ソーマ」を明確に区別して神学的意味を付与した用い方をしている。

**福音書日課(マルコ 4 章より)**

・日課箇所は、「種を蒔く人のたとえ」から始まる一連の「たとえ」に関する逸話をまとめた章句から「種を蒔く人のたとえ」とその説明部分を除いた二つの箇所。第一の箇所は、「種を蒔く人のたとえ」が語られた場面に続いて置かれ、たとえで語られる理由が旧約の引用と共に示されている。第二の箇所は、4 つの短い「たとえ話」が羅列された後で、福音書著者の解説として「たとえ」で語られた理由が示されている。

・日課箇所からは、大きく分けて二つの黙想課題が示される。一つ目は、二つの箇所で示される「たとえ」で語られた理由についてで、第一の箇所の主イエス自身の言葉と、第二の箇所の福音書著者の解釈の言葉とを、同じ意図のものとして黙想する。二つ目は、第二の箇所で羅列されている 4 つの「たとえ話」そのものの使信の黙想で、個々の「たとえ話」を独立したものとして解釈するのみならず、「種を蒔く人のたとえ」と合わせた一連のまとまりの中で解釈していくこともできる。

・「たとえ」で語られた理由について、共観福音書各書の著者間では、多少理解に相違があるように思われる。すなわち、「マルコ」では、主イエスが人々の理解力に合わせるために「たとえ」を用いられたのであって、弟子たちには適宜説明が与えられていたとされる。一方「マタイ」では、「たとえ」は「隠されていた教え(奥義・密教)」が開示されたことを人々に示されるためであるが、弟子たち以外の人々にはその意味を理解することは困難であるとされている。これに対して、「ルカ」は著者の解釈を放棄しており、主イエスの元来の「たとえ」を用いられた理由についての言葉が、初代教会において必ずしも明確に統一解釈されていなかったであろうことを示唆することになっている。

・4 つの「たとえ話」のうち、最初の二つ(「ともし火のたとえ」と「稗のたとえ」は「ルカ」に並行箇所があり、最後のもの(「からし種のたとえ」)は「マタイ」と「ルカ」の両方に並行箇所がある。一方、三つ目の「成長する種のたとえ」は、「マルコ」だけが伝えている。他方、「マタイ」は別のたとえ(「毒麦のたとえ」および「天の国のたとえ集」)を並べて伝えている。「マルコ」だけが伝えている三つ目のたとえに「マルコ」独自の強調点を見出すことも可能だろう。

**来週の誕生日 (2月6日～12日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-207 番「ほめよ主を」は、1960～70 年代の礼拝改革運動の流れの中で英国教会司祭パワーズが作詞。曲は、20 世紀米国の代表的な教会音楽家 R.W. ダークセンの作曲。
- ・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82

番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讃美歌集に採用された。

- ・21-361 番「この世はみな」(= I 90 番「こもかみの」)は、19 世紀末米国長老派牧師モルトビー・D・バブコックの作詞で、原歌詞は 16 節ある。曲は 19-20 世紀米国で教会音楽家として活動したフランクリン・シェファードの作曲とされているが、原曲はイギリス民謡によるとされている。曲名の「TERRA BEATA」は、ラテン語で「祝福の大地」という意味。

**21-207「ほめよ主を」****We the Lord's People**

1. We the Lord's people, / heart and voice uniting, / praise him who called us out of sin and darkness / into his own light, that he might anoint us / a royal priesthood.
2. This is the Lord's house, / home of all his people, / school for the faithful, / refuge for the sinner, / rest for the pilgrim, haven for the weary; / all find a welcome.
3. This is the Lord's day, / day of God's own making, / day of creation, day of resurrection, / day of the Spirit, sign of heaven's banquet, / day for rejoicing.
4. In the Lord's service / bread and wine are offered, / that Christ may take them, / bless them, break and give them / to all his people, his own life imparting, / food everlasting.

**21-425「こすずめも、くじらも」****God of the Sparrow**

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

**21-361「この世はみな」****THIS IS MY FATHER'S WORLD**

1. This is my Father's world, / And to my listening ears / All nature sings, and round me rings / The music of the spheres. / This is my Father's world: / I rest me in the thought / Of rocks and trees, of skies and seas; / His hand the wonders wrought.
2. This is my Father's world, / The birds their carols raise, / The morning light, the lily white, / Declare their maker's praise. / This is my Father's world, / He shines in all that's fair; / In the rustling grass I hear him pass; / He speaks to me everywhere.
3. This is my Father's world. / O let me ne'er forget / That though the wrong seems oft so strong, / God is the ruler yet. / This is my Father's world: / why should my heart be sad? / The Lord is King; let the heavens ring! / God reigns; let the earth be glad!